地域の大きな力で小さな学校を支える

―見附市田井小学校を訪ねて―

編集部

はじめに

見附市は、平成の大合併に与せず、小中学校の統廃合もせずに学校教育をすすめている珍しい自治体である。

県教委が適正規模論の名の下に小規模学校の統廃合を奨励している中で、見附市内小学校8校のうち3校が複式学級のある少人数教育を推進している。そこで、少人数による教育をどのようにすすめているか、複式学級の中心的な役割を担っている田井小学校を訪ね、高橋道子校長にお聞きした。（聞き手・内山雄平と伊藤英世）

1、学校の概略

学校の規模は、1学年1学級（10人）、2学年1学級（10人）、3学年（4人）・4学年（9人）および5学年（6人）・6学年（2人）。3・4学年および5・6学年は複式学級。来年で150周年を迎える。教員10名、職員は1名。

オープンスクールとして校区外の児童4名在籍。

複式学級の教科指導は、算数・国語は同時並行で、社会・理科は学年別の順序によらない指導、両学年がAの内容で、次年度はBの内容で年度ごとに入れ替わる単元で展開する。

これら複式学級の教員の負担を軽減するため小規模

校対策として市独自で教員免許をもつ指導助手（1日4時間）を配置している。

2、少人数教育の優位性は何か、デメリットをどう克服しているか

少人数教育の良さはやはり一人ひとりの子どもを丁寧に見られることが最大の魅力である。新採用の教員が大規模校で3年の経験を経て、昨年赴任した若い教員に率直に聞いたら、一人ひとりに関わる時間が多くてやりがいがあるという。個別に相手の話を聞く、話せる対話をゆとりをもってすすめることができ、教師と子どもたちとの人間的なつながりが深まり、子ども同士も深くなる。ここを大事にしたいと高橋校長は強調する。

反面、いろいろな人との関わりが少ないため、相手との人間関係が固定化しお互いに遠慮があったり、切磋琢磨する機会が少ないため得意とするところが変わらなくなったり、自分の新たな成長が見えにくくなる。これが当たり前という認識にもなる。このような弊害を少なくする上で、後述するようにここしかない世界ではなく別の世界もあるという認識を育てるため、複式学級3校同士の交流を盛んに行い、地域との交流も深め一人ひとりの視野を拡げる取り組みをすすめている。

また、教師の一人ひとりに関わる手があつくなるため、そのぶん子どもたちの自主性や主体性を損なうこともでてくる。そこで複式学級では、ある学年を教えている間、別の学年の児童は復習する時間帯となるので、その時間の学習を大事にし、自分たちでできることは自分たちで行えるように自主性や主体性を尊重する指導を心がけている。その時見てくれる指導助手の役割は大きい。具体的な取り組みを次に見てみよう。

（1）複式学級3校（田井小・見附第二小・上北谷小）との交流で社会性を拡げる

令和4年度みつばプランでは次の①～③をそれぞれ各校で分担し、教育水準を高める。

①リモート授業の展開：令和3年度に一人1台情報端末が整ったので、情報技術（ICT）を活用してこれまでの各学年各一回の交流が年3～4回となり、3・4年生は年間3回ほど同級生と楽しくつながる授業（田井小13、上北谷小12、見附第二小10）となった。今年度はリモート授業を年間通して交流をはじめた。

②「自然体験教室：5年生（見附第二小7、田井小6、上北谷小3）コミュニケーションゲーム、Eボート、ウォークラリーなどを実施。

③合同体育学習：「フットサル」（室内サッカー）。3・4年生（上北谷小10、見附第小9、田井小9）アルビレックスのコーチによる指導。

また、児童会・生徒会会議を南中学校区内の5つの学校（中学校1、小学校3、特別支援学校1）をリモートで意見交換を実施。

（2）子どもたちの教育を支える地域と学校の連携・協働

見附市はすべての小・中・特別支援学校が小学校区内で保護者・地域住民の代表で構成される学校運営協議会を設置したコミュニティスクールとして機能している。地域学校協働本部が中心となり、田井小学校の校区内では田井小PTA、北谷南部みつばコミュニティ、それぞれがコミュニティ事業として位置づけられているので、全校児童41人の10倍位の組織である。地域とのつながりを深め、学校運営に地域の声を生かし地域全体が支援する体制づくりとなっている。

平成22年「北谷南部みつばコミュニティ」が当校に開設され、地域と学校の結びつきをコーディネートすると同時に地域づくりの役割も果たしている。当校との共催で大運動会を開催。これまでの学校支援の功績で「地域による学校支援活動」で文科大臣賞を受ける（平成23年）。田井「虹のかけはし隊」など地域とともに読書活動の推進で「第47回高橋松之助記念朝の読書大賞」を、地域と学校の連携・協働の功績で「地域学校協働活動」で文科大臣賞を受け、地域と学校とが一体となって、小さな学校の教育をすすめてきた。

（3）学校行事等に関わる地域指導者の支援を受ける

①バス遠足から歩きで地域を知る…1～6年生までこの地区の歴史や文化を学んでいるので日頃の学習を実感できる。住む地域の良さを発見し、守る大切さを育む。耳取遺跡（縄文時代の国指定史跡）などの見学先はこれに詳しい専門家に説明してもらう。

②事業への参加として

○学校PTA…プール・持久走・スキーボランティア。

○北谷南部みつば…みまもり隊、校地内草刈り。

○みつば太鼓指導、伝承館での耳取遺跡の学習。

以上の取り組みは、小さな学校を地域の大きな力でいかに支えているかが分かる。そのことが子どもたちの視野を広げ、別世界のあることを認識し、自分たちの立つ位置を確かめると同時に、住んでいる地域の良さを肌身で感じ、地域を育てる力となる。

3、地域から小さな学校に期待されていること

一つは、ばあちゃん・じいちゃんたちが子どもたちと一緒に過ごす場を持ちたい。コロナ禍の前は、大運動会とか文化祭に該当する学習会が「ふれあい祭り」という企画で大勢集まる機会があったが、今はできなくなった。運動会で踊っていた「見附音頭」はお願いすると喜んで教えてくれるし、先日行った地域の遠足時には挨拶したいと沿道の人が、家から飛び出す程である。子どもの元気な声を聞き、学習している姿を見たいという思いがある。これに応えたい。

二つには、子どもたちが地域の未来を見、盛り上げていく教育活動を大事にしたい。地域の伝統文化を大切しながら、これからどうすれば良いのか、子どもたちが主体的に関われる活動をすすめたい。今年度は、5・6年生が、先輩たちが残してくれた「耳取遺跡」のパンフで人を呼べる施設としてお披露目しようと計画をたて学習をすすめている（市は２０２０年、耳取遺跡整備基本計画を策定した）。４年前にはこの遺跡をもっと有名にしたいと「土器耳土（どきみみと）」というキャラクターをデザインした。翌年には耳取遺跡から出土したかけらをイメージした「耳土のおやつ」として業者が商品化し、新潟県学校生協にも取り上げられた。子どもたちの元気な声で地域をアピールする動きとなっている。

参考文献
・「学校要覧」見附市立田井小学校
・「令和４年度みつばプラン活動について」
　みつばプラン推進委員会事務局
・「きめ細かい指導・魅力いっぱいの学校へ」
　見附市教育委員会

（文責・内山）